

仲間からの便り

2015年7月 No.19

かめのりコミュニティの仲間から、近況報告やアジアでの体験を振り返り改めて感じることで、これからアジアへ行こうと考えている人へのメッセージが届きました。

高校生カンボジアスタディツアーに参加したみなさん

菊池 裕太 (2014年 カンボジア)

4月から高校3年生になり、勉強、行事ともに頑張っていきたいです。将来は、人道支援に何らかの形で関わればと考えています。カンボジアでお世話になったユネスコの方からの誘いで、「ステップアップ塾」という日本の寺子屋運動のような活動にふれることもできました。

プログラムへの参加により、「異文化理解」の対象が、単に「異なる文化」ではない、ということがよくわかり、異なる国々の人々が共通してもつ感覚、モラルなど「同じところ」がたくさん見られました。逆に自分の中にも昔と「異なる自分」を見ることができ、それは「自分理解」にもつながったと思います。学びが多いことは確固たる事実だと思います。このようなプログラムに参加したいと思っているなら、ぜひチャレンジしてみてください。チャレンジした時間以上に価値のある学びが待っているといます。

日向 優里菜 (2014年 カンボジア)

この春、以前から興味があった国際看護に力を入れている上智大学に入学しました。4月には、医療系学生が全国から集まる全国医学生ゼミナールがあり、講演を聞き、医療に関わる討論会に参加してきました。将来は、発展途上国の医療に携わりたいと考えているので、英語でコミュニケーションを取れる力をつけようと留学生との交流も積極的に行っています。

プログラムに参加したことで、いろいろな刺激を受け、帰国後の普段の生活がより実りあるものになりました。異文化を知ることですら客観的に捉えることが以前よりできるようになり、当たり前だと思っていたことが当たり前でないことを知り、感謝の気持ちを常に意識するようになりました。



大学の入学式にて



カンボジア・プノンペンの繁華街で

高校生短期交流プログラムに参加したみなさん

中田 柚香 (2010年 中国)

去年の9月から今年の1月まで中国の上海に留学しており、北京に旅行に行った時にはかめのり財団のプログラムで訪れた場所に何箇所か行き、4年前のことをなつかしく思い出しました。当時よりも語学力をアップさせることができ、今は、中国語の検定合格に向けて勉強しています。また、留学中に韓国人の友達がたくさんでき興味を持ったため、韓国語も勉強しはじめました。

短期留学をした時に思ったことを話せなかった悔しさから、継続して中国語を勉強し、再び留学へ行き、当時の悔しさをはらすように中国語を使って思う存分会話しました。4年という時間でも中国は変化していて、その変化を感じることができたのもプログラム参加のおかげだと思います。変化し、成長しているアジアを生で見ることは非常に貴重で、学生時代にこのようなことを感じることは、私にとってとても大きなことでした。これからもそういったことへの関心を忘れずにいたいと思います。

和田 悠希 (2014年 韓国)

夏休みにフィリピンのセブ島へ語学研修に行きます。今はその語学研修のために一生懸命勉強しています。

韓国へのプログラムに参加した経験から、何にでもチャレンジしてみようという気持ちになりました。今、日本と韓国の関係は悪いと言われていますが、実際に行くとそんなことは一切感じませんでした。だから、決めつけるのではなくその国に行って自分の目で確かめることが大切だと思います。



昨夏、韓国で通学した始興(シフン)高校で友達と一緒に(写真前列中央が和田さん)

中学生交流プログラムに参加したみなさん

塚本 日向 (2014年 インドネシア)

インドネシアで学んだことが今の生活に十分に生かされています。書き損じはがきを集めて貧困地域への支援を行い、4月には書類審査や面接を通してあるキャンプにも合格しました。受験生である今年の目標は、勉強に力を入れることといろいろな人とふれあい様々な価値観を学ぶことです。将来の夢は具体的には決まっていますが国際的に格差をなくせる仕事があったらと思います。

プログラムに参加して、特にジャカルタでアジアの急成長を感じました。行く前は、どこもスラム街というイメージでしたが、実際にこの目で見たものは建ち並ぶビルの数々でした。これからプログラムへの参加を考えているのならば受験や勉強などは気にせず応募すべきだと思います。急成長を遂げているアジアを見ることで日本との違いが見出せたり、国民性の違いが見えてきたり、かけがえのない体験ができることは間違いないでしょう。それらの経験は自分がそうであるようにこれから参加する人も人生の1ページとして大いに役立つことになるでしょう。

佐藤 純 (2013年 ベトナム)

高校生になりバドミントン部に入部し、日々練習に励んでいます。高校生になると社会科の教科が細かく分かれ、地理などの授業が始まったことで、世界に対する関心が高まっています。これからも積極的にいろいろな事に挑戦していきたいです。

田中 恵一 (2011年 マレーシア)

昨年はカナダに行き、2週間ホームステイを体験して、マレーシアに行った時よりもコミュニケーションがとれるようになっていて英語力の上達を実感しました。

マレーシアを訪問し、苦勞してでもコミュニケーションをとることはとても大切だと感じました。実際に、英語が授業で分かっている、話すことは全く異なるということを実感することは、その後の英語学習に大きな影響を与えていると思います。会話を積極的に行い、たくさん失敗することが重要だと今、考えています。

酒井 美晴 (2010年 韓国)

この春、念願の医学部医学科に入学しました。妊婦の緊急搬送先が見つからず命を落とすというニュースを見て、偏在による医師不足という社会問題の役に立ちたいという思いが、医師を志すきっかけとなりました。医学部受験は想像以上に過酷なものでしたが、今は毎日が楽しく充実しています！一人前の医師になるにはまだまだ時間がかかりますが、たくさん勉強して、たくさん今しかできないことに挑戦する大学生活を送りたいです。

韓国でお世話になったホストシスターとは、まだ連絡をとりあっています。いつか、韓国で会いたいと思っています！一緒に派遣されたメンバーとも、LINEで連絡をとり、関東に住むメンバーとは1年に1回は会っていて、プログラムから5年近くたった今でもこうして集まることができ嬉しく思います。プログラムへの参加は、他国への理解や興味を深めると同時に、知らなかった世界に触れ、自分を見つめ直す良い機会となりました。学校の掲示を見て、ためらいながらも応募してみようと行動した自分に、今とても感謝しています。参加を通じて、今ある機会への「挑戦」が目標となりました。

高校生短期交流プログラムに参加したみなさん

渡壁 みなみ (2014年 韓国)

今年の4月に大学に入学し、文学部に在籍しています。最近ではイタリア語の勉強も始めました。大学で出会う韓国人留学生とのコミュニケーションの時に韓国での経験が役立っています。来年の韓国へのプログラムを考えている方、応援しています！

山縣 梨華子 (2010年 中国)

4月から私立大学の職員として働き始めました。大学を就職先として選んだのは、大学での専攻である「教育学」と今まで一貫して取り組んできた「国際交流」の二つの軸が交わる点が大学にあるのではないかと考えたからです。将来は、国際交流センターもしくは海外の分校で勤め、留学生の支援や海外大学との提携に携わりたいです。そのために英語力により磨きをかけようと励んでいます。

中国に短期留学して以来、大学生になってか

らも留学やボランティア、インターンシップ等でアジア各国に滞在してきました。これまで東アジア・東南アジアの約10の国や地域に渡航した経験から感じることは、日本以外のアジアの人々は日本人以上に、家族や友人と親密な人間関係を築いているということです。以前から人間関係の希薄さに疑問を感じていた私にとって、アジアでの経験は自分自身の人間関係の築き方を改め直すきっかけとなりました。

アジアの国々の多くは未だ発展途上国ですが、物質的な豊かさばかり追い求めることに疑問が投げかけられ始めている今だからこそ、アジアに学ぶことも多いのではないかと私は考えています。今後プログラムに参加する人は、固定観念に捉われず柔軟な視点で異文化を見つめ、新たな価値観を築き上げていっていただけたらと思います。



シンガポールでインターンシップをした際のホストファミリーと、マレーシアの民族衣装「クバヤ」を着て結婚式に参加(写真右から二人目が山縣さん)

山藤 千穂 (2013年 ベトナム)

ベトナムへの派遣をきっかけに、より海外の人と交流したい、異文化に触れたいという思いが強くなり、昨春、広島市立舟入高校の国際コミュニケーションコースに進学しました。日本文化を身に付けたいので、茶道部に入部し、高校では、留学生との国際交流宿泊研修や海外語学研修を通して異国の文化を学んでいます。又、ホストファミリーとして韓国、フランスからの留学生を受け入れる予定です。

中学生の時にアジアの国を訪れ、現地の人と交流することは、大きな意味があると思います。進路や自分のやりたいことが見つかり、それが将来の夢にも繋がると思います。

根岸 諒多 (2009年 中国)

昨年、法学部に進みました。刑法に興味があり、また言語もフランス語、中国語、アラビア語を選択しています。3言語を勉強するのは大変ですが、色々な世界、時には意外な繋がりも見えて楽しいです。サークルは、剣道と写真研究会に所属し活動しています。

プログラムで中国に訪問して、確実に得たといえるものは、人との繋がりで。その時に知り合った人たち、更にはその人たちを通じて知り合えた人たちなど、多くの繋がりを生みかけを作ってくれました。また、興味の幅を広げるきっかけにもなり、大学で3言語を取っている理由も、ここにありますが、これだけ書くと、派遣先が中国でなくともよかったのではないかなと思われるかもしれませんが、先ほど挙げた人たちは、中国へ行ったからこそ知り合えた人たちで、繋がることができた人たちです。これまでのさまざまな経験を礎に、「今の僕」がありますが、もしこの出来事がなかったとしたら、また違う環境での「今の僕」になっていたことでしょう。このような繋がりが、僕の得た最も大切なものであり、今でも宝物です。

当時は、中国語も英語も話すのが苦手で、人見知りで中々行動を起こせなかった僕が、1回勇気を出しただけで、多くの繋がりを生み出しました。辛く大変だったこともありましたが、それも含めて参加して良かったと確信をもって言えます。参加したい気持ちが強いのなら、自分の気持ちを信じて参加してみることをお勧めします。



大学で剣道も頑張っています！

湯口 芽衣子 (2014年 インドネシア)

4月に高校生になりました。具体的な将来の夢は定かではありませんが、国際関係の仕事に就きたいと思っています。そのために、まず語学力が必要だと思い、1年間の留学を考えています。また、私の学校では、第1外国語に英語か仏語を選択できるので、他の人とは違うことをしたいと思い、仏語を選択しました。

インドネシアでお世話になったホストファミリーとは今でも連絡を取っています。国や言語が異なっても友達になれるのだなと感じ、これからもプログラムを通じて知りあったホストファミリーや友達を大切にしていきたいと思っています。そして、何事にも挑戦することが大切だと思いました。



お正月に着物を着用 (写真左が湯口さん)

渡邊 駿介 (2013年 ベトナム)

高校2年生になり、海外進学を主に目指す受験のためのプログラムが始まりました。授業は英語でとても難しいですが、グループディスカッション中心の授業なので、それはすごく楽しいです。

去年8月、僕は、現地の方との交流とボランティアを目的とした2週間のプログラムで、フィリピンのボホール島、セブ島、レイテ島に行き、それぞれの学校を訪問しました。フィリピン人はベトナム人や日本人よりフレンドリーで、色んな子に声をかけられました。レイテ島の学校では教室を出た後、写真攻めにあい、ボホール島の学校では全校生徒の前で「My name is Shunsuke」と言っただけでキャーキャー言われ、人気者になった気分になりました(笑)。その根本には、ベトナム同様、日本のことが好きということがあったのだと思いますが、改めて、日本の素晴らしさを感じ、フィリピンをとて身近に感じるようになりました。やはりアジアに行くことは大事なのだと思います。

ボランティア活動では、2013年の地震と台風の被害を受け、服を失った人に日本で集めた古着を、子どもたちには文房具を配りました。他に、孤児院で折り紙を教え、少ない数の靴を使いまわして履いているサッカー少年

小野 由美子 (2013年 ベトナム)

ベトナムのプログラムに参加してから国際交流に興味を持ち、昨年夏休みにはカナダでのホームステイと語学研修に参加しました。その後、2015年1月から約3か月間、ニュージーランドの女子高へターム(学期間)留学し、英語で授業を受けました。また、私の家ではベトナム人中学生のホストファミリーをして以来、北京大学の学生、上海の高校生を受け入れています。特に、上海の高校生は、かめり財団のプログラムで、来日し、3週間、私と同じ学校に通い、弟の習い事(剣道、習字)も一緒に体験し、家族も楽しく過ごしました。私は高2になり、将来についてはまだ定まってはいませんが、これからも国際交流を楽しんでいきたいと思っています。未知の国だったベトナムの空気や風土、様子を中3で体験できたことは本当に貴重な経験でした。皆さんも積極的に参加してほしいです。

にサッカーシューズを配りました。ただ交流するだけでなく、実際現地に行き困っている人々を助ける活動をした今回のプログラムは、素晴らしい経験になりました。

数年前までは、ヨーロッパやアメリカに強い憧れがあり、それは今でも変わりませんが、ベトナムに行ってきた後は、アジアへの関心も高まりました。ベトナムでは、日本にとっても親密な関係にあるということを知りました。日本はベトナムに多大な支援をし、また日本製のバイクはベトナム人にとって日常の一部でした。これは昨年行ったフィリピンでも一緒で、日本はアジアに必要不可欠な国で、日本抜きでは生きてゆけないということも感じました。もし安価かつ高性能の日本製バイクが製造されなくなったら、ベトナム人は大事な交通手段を失うことになってしまいます。もし日本のトンネル業者が海外進出していなかったら、ベトナムの二つの大都市は結ばれることはなかったでしょう。それだけ日本には責任があり、もっとアジアの国々への支援を増やすべきなのです。こう思った後から、自分はアジアの国々に興味を持つようになり、やはり日本はアジアの一部なのだなと実感することができました。このプログラムに参加できて、本当に良かったと思います。

高校生交換留学プログラム(長期)に参加したみなさん

吉川 愛美 (2009年 韓国)

現在、アメリカ カルフォルニアにある Diablo Valley College で心理学を専攻し、秋からはカリフォルニア州立大学ロングビーチ校に編入予定です。具体的な将来の夢は、まだ決まっていませんが、心理学という観点から世界を知り、その知識と経験が日本の将来を良くするように努めたいと思います。

韓国でのプログラム体験は、今思うと大変だったと思います。自分もすごく未熟で考えが浅かったことや思いやりのなさなどたくさんの事に気づいた一年でした。しかし、その経験が人の心の深さや優しさ、丁寧さを感じることができ、もっともっとアジアの文化や習慣が世界に広がれば良いと思いました。

菅原 千尋 (2012年 タイ)

留学経験により、視野が広がり、さらに海外の法について興味を持ち始め、国際的な分野を幅広く学べる大学の法学部に進学しました。法学を通して、日本と海外を見つめ、どのようにしたら公平で平等な経済活動が出来るのかを考え、人と人との関わりを深く学び、将来は国際的な支援をする JICA などに務めたいと思っています。

近年、メディアによるアジアと日本の関係を見ると毎日のように歴史問題での国家間の不仲が報道されています。日本を中傷する近隣諸国とその中傷を非難する日本。このような報道を見ていると、いつまで経っても関係は一向に改善しないように思えてきます。しかし、実際問題、本当に不仲なのでしょうか。私は、不仲を解消することは決して不可能ではないということにこのプログラムを通して気づきました。メディアに左右されず、私たち若い世代が興味を持って、アジアの歴史や文化を尊重し、学び、自分たちの真の考えを共有すれば、この問題を解消できると思いました。歴史は決して変えることができませんが、私たちはきっと未来を変えることができます。ひとりでも多くの方がプログラムに参加し、アジアに対する本当の考えを持ち、平和な新しい時代を築いていくという経験をしてもらいたいです。



カレッジの卒業式で友人と(写真左が吉川さん)

前川 純菜 (2010年 インドネシア)

帰国してから4年近く経ちますが、留学の経験が今の大学生活に大いに役立っています。インドネシアに留学した時の歴史の授業がきっかけで、文学部の東洋史を専攻することになりました。今、またインドネシア語の勉強を直しています。インドネシアの歴史(特に日本が統治していた時代の)を研究するため、日々勉学に励んでいます。将来は世界史の教員になりたいと考えています。

これから留学を考えている人には、不衛生だとか治安が悪いという固定概念を捨て、是非アジアへ行ってほしいと思います。アジアには昔から日本とのつながりが強い国が多く、日本に好意的な国も多いので、中身の濃い留学生活になるとと思います。

片岡 理沙 (2012年 インドネシア)

留学を経て、外国の文化や宗教、言葉、国際問題に関心を持つようになり、大学では国際学部へ進みました。今は、大学のボランティアセンターの海外のボランティアなどを扱っている団体に入り、イベント企画や世界の女の子の教育支援等に力を入れています。将来は青年海外協力隊などで活動したいと思っています。

インドネシア語を習得したことで、マレーシアへ旅行しインドネシア語が通じました。また、インドネシアで経験したことが色々な物事を考える際に広い視野で、考えることができるようになりました。これからプログラム参加を考えている方、今注目のアジアでの留学を笑顔で有意義なものにしてください。

福伊 永花 (2008年 マレーシア)

以前より興味があった「あるべき行政のあり方」をより深く追求したいと考え4月より公共政策大学院へ進学し、行政学を専門としています。

プログラムに参加した意義について、改めて考えると、周囲の人と違うことを考える時間を得たという点にあると思います。日本の高校で3年間過ごした同級生と比較すると、異国の地に1年間身を置いたことで、得たものの特異性を痛感する場面があります。例えば、大学の部活動に留学生が体験に来たとき、私の周囲は隠し、留学生になかなか話しかけませんでした。私は自分が留学生だったとき、同級生にサポートされ、優しさやあたたかさを感じたことを思い出し、積極的に話しかけたり、困っていることはないかと聞いたりします。このように、自分と異なるバックグラウンドを有する人との接し方が積極的になったことは、私が得たもののひとつです。従来、慣れ親しんできた環境で考えたこととは、また別の角度から世界を見てみたいと思うのであれば、本プログラムは貴重な財産になるのではないのでしょうか。

砂川 晃広 (2012年 中国)

4月に東京の大学に入学し、学業はもちろんですが、サークル活動として文芸・軽音楽を始めてとても充実した毎日を送っています。

中国に留学して、おそらく僕は文化や中国にまつわる知識という意味ではあまり学べていないかもしれませんが、やはり得たものは大きいと思います。まず、精神的にとっても成熟できたように思います。これは参加する前までのなんの心配もいらない生温い生活では決して得られなかったものです。“常識”が違うことで生まれる誤解というものを実際に体験できたことや日本で取りざたされる政治的問題などの中国人の生の意見を聞いたこと、場所が変わっても“人”は変わらないことなど色々とう得ることがありました。

これから留学を考えている方には、「不安だから」という理由であきらめることだけではないようにしてください。躊躇して、一步を踏み出さないでいることは人生においてたいいてい損な選択です。“不安”と“リスク”は違います。是非、大きな一步を踏み出してみてください。